

# ブダペスト通信

盛田 常夫



2023年 NO.2

1月13日

スポーツ観戦雑感

## 低迷するスキージャンプ陣

恒例の年末年始のスキージャンプ週間が終わり、スキージャンプ W 杯は後半戦に入る。

昨シーズン、2度目のジャンプ週間優勝、2度目の W 杯年間総合優勝を達成した小林陵侑だが、今シーズンはジャンプ週間でも W 杯でも 20 位前後の成績に低迷している。

信じられないことに、予選落ちや 2 回目のジャンプに進めない大会もあった。昨シーズンはほぼすべての大会でトップテンに入っていたから、その低迷ぶりが話題になっている。

昨年シーズンの小林は、五輪金メダルを含め、主要なタイトルを独占し、W 杯獲得賞金も史上最高額に達した。だからすべてを達成した今シーズン、インセンティブを失ったとしても不思議ではない。本人も祝賀会が多くて、トレーニング不足だったことを認めている。やはり世界の舞台は厳しい。トレーニング不足や調整ミスはすぐに結果に直結する。

もっとも、低迷しているのは小林だけでなく、昨シーズン終盤まで総合優勝を争ったドイツのガイゲルや、五輪やジャンプ週間で金メダルを競ったリンドヴィック（ノルウェイ）も、小林同様に低迷している。それにたいして、昨シーズンは不調だったポーランド選手やオーストリアのベテラン選手が活躍している。

今シーズン絶好調のクバツキー（ポーランド）は総合ポイントで首位に立つ 32 歳であるが、昨年は総合 27 位に沈んでいる。キャリア終盤になって、彼はフォームを変えた。昨年までは踏切から高く上がるジャンプで、原田雅彦選手とよく似た飛行線を描いていた。高く上がりすぎると、最後に失速する。途中までは大ジャンプを予想させるのだが、いつも最後にドスンと落ちていた。しかし、今年は高さを抑え、より直線的に強いジャンプを心掛けて飛距離を伸ばしている。さらに、W 杯 39 勝、ジャンプ週間 3 度の総合優勝（1 度はグランドスラム）を達成しているストックは 35 歳で、ここ数年は衰えが目に見えていたが、今シーズンは総合 9 位と健闘している。同じく 35 歳のジラは総合 5 位に付けている。この 3 選手のようにポーランドの選手は良く仕上がった状態で、今シーズンの W 杯に参加している。

たんにトレーニング不足やパワーだけが原因でないところに、スキージャンプの難しさがある。いったん踏切の感覚を失うと、なかなかそれを取り戻すことができない不思議な競技である。

一つ確実に言えるのは、今の小林には踏切の力強さがないことだ。調子がよい選手は飛び出した瞬間に、ジャンプの高さや勢いがはっきり分かる。今年小林にはそれがみられない。明らかに基礎トレーニングが不足していると思われる。

もう一つの原因は日本のジャンプ陣全体の調整不足である。小林以外の選手は軒並み、最下位周辺を低迷している。50人に絞られる予選には多くて65名ほどの選手が参加する。その中には数名の競技者しかいないようなジャンプ弱小国の選手が10名前後はいる。だから予選を通らないことなど、考えられないことだった。ところが、今シーズンは予選落ちする選手が続出で、本選に入っても上位30位に入れず、2回目のジャンプに進めない選手がほとんどである。わずかに小林陵侑とヨーロッパに拠点を移した中村直幹が2回目のジャンプに臨めるだけで、この二人もインスブルック大会では上位30名に入ることができず、日本人選手は完全に蚊帳の外だった。30名で戦われる2回目のジャンプに進めないと、W杯得点はゼロである（優勝が100ポイント、30位が1ポイント）。

昨シーズンの方がコロナ規制で日本選手のトーナメント環境は厳しかった。日本へ簡単に戻れない日本選手団はヨーロッパ各地を転戦し、疲れを癒す暇がなかった。平日に自宅に戻ることができる欧州の選手とのハンディキャップは明らかだった。しかし、欧州の雪を離れずにトレーニングできたことが結果につながった。今年のヨーロッパは雪が少なく、練習用のジャンプ台を確保するのも難しいと思われる。日本往復の旅行時間も増えた。選手環境は厳しい。

ジャンプ週間を終えた前半戦の成績は、佐藤慧一が得点ゼロで最下位の62位、W杯初陣の二階堂漣が3得点の51位、昨年総合13位の佐藤幸椰がわずか12得点の40位、小林潤士郎も12得点の40位、中村直幹が118得点の24位、小林陵侑が161得点の20位である。過去の低迷期でも、これほどの惨状はなかった。明らかにジャンプ陣全体が調整不足のまま参戦しており、選手団コーチの責任は免れない。今年は若いコーチ陣が経験を積むためのシーズンだといわれているが、この惨状から何を学ぶのが大切である。

W杯札幌大会を契機に、派遣選手の入れ替えが必要になっている。

### 2023年WBC

今年のWBC（World Baseball Classic 2023）は、大リーグの第一線の選手が多数参加するので関心が高い。これまで野球普及のためのエキジビジョン的な意味合いが大きく、大リーグの選手の参加意欲は高くなかった。しかし、大リーグ球団側の意識の変化があ

り、スポンサーの意向もあって、WBC はいわば大リーグの国別対抗戦のような様相を呈してきた。それはそれで大リーグの新たな営業戦略として興味深い。将来的には選手の負担を減らすために、地区予選などを廃止して、大リーグの国別対抗戦として、割り切った大会にする必要があるだろう。

すべての試合をアメリカ本土でこなすアメリカに比べ、日本はアジア予選があり、力が劣る相手との試合を経て、アメリカへ渡るという負担がある。シーズン開幕前の重要な時期に、所属球団での最終調整から離れて、WBC 用の日本チームキャンプに参加すれば、調整スケジュールがうまく立てられない。とくに投手は調整が十分にできていない体で WBC に参加すると、肩や肘に予期せぬ負担がかかり、故障につながる。現在の WBC 優勝の価値は限りなく低い。エキジビジョンに出たためにシーズンを棒に振れば、選手にとっても球団にとっても莫大な損失である。

ダルヴィッシュや大谷は開幕前の調整の仕方を知っているのもそれほど心配はないだろうが、それでも開幕直前の重要な時期まで、長期にわたって拘束しては今シーズンの成績にかかわる。無理をさせるべきではない。とくに大谷の場合、二刀流が爆発して3年目の今シーズンはトレード年になるので、最低でも過去二シーズン並みの成績を残すことが必要になっている。大リーグ史上最高額のトレード（あるいは契約更新）が予想される大谷が、エキジビジョンマッチが原因で故障すれば元も子もない。

気になるのは今シーズンから大リーグに参加する選手である。レッドソックスと5年9000万ドルの破格の契約を結んだ吉田正尚選手だが、いまだ海の物とも山の物ともつかぬ選手に、レギュラーが保証されているわけではない。年俸25億円近い契約である。1年目の成績が悪ければ、未代まで「失敗契約」として語り継がれる。投手に比べ、日本人野手は苦戦する事例が多く、吉田選手の体格を考えれば、大リーグの速球投手に慣れるのは簡単ではない。イチローのような活躍が期待されているが、過剰な期待である。

WBC の日本チームでは、野手の場合、国内キャンプからの参加が原則となっている。そうならば、アメリカでのキャンプやオープン戦を経ずに、いきなり大リーグの開幕に臨むことになる。所属チームになじむことなくレギュラーを獲得できると考えているとすれば、あまりに安易な姿勢だと批判されても仕方がない。

ただでさえ今シーズンの吉田選手は苦戦するという予想が立てられている。アメリカのデータ会社の事前予想では吉田選手の打率が 0.218 と誠に厳しい数値が示されている。WBCに参加してもなお、苦戦の前評判を覆す活躍ができるかどうか。

栗山監督によれば、本人の強い参加意思によるものだというが、あまりに無謀である。いかに本人の意思とはいえ、本人の決断を窘める人はいないのだろうか。WBC 参加のために、大リーグ1年目を犠牲するのは本末転倒であり、問題の重要性への自覚が足りない。代償の対象が比較にならない。もし WBC 参加を事前調整に代替できると考えているのなら完全に間違いである。本人が大リーグ初年を迎える自覚をもっているのかどうか。五輪に参加するような気持ちなら、大きな代価を払うことになるだろう。

### レジェンドと神様

全豪オープンテニスに大坂選手は参加しない。引退の危機と報道されたが、昨年春以後、1回戦で負けた全米オープンで1試合しただけ（9月の東レオープンで5分ほど出場）だから、事実上の引退である。コーチもトレーナーもいなくなったのだから、トーナメントを戦う態勢になっていない。ツアーで戦う意欲を失ったのだから、不参加は予想された。若くして頂点に立った選手で、早々と引退した選手はそれなりの数で存在する。何事も、意欲やインセンティブがなくなれば、それを続けるエネルギーは出てこない。ただ、それに代わる何かを見つけるのは簡単でない。大坂選手の場合は自分が何をしたいのか分からなくなっているのだろう。

ただ、最近になって、大坂は妊娠を公表し、出産後のテニス界への復帰を表明した。子育てしながらテニス界に復帰することが新たな目標になるのかもしれない。大阪にはテニスを続ける意味や明確な目的が必要なのだ。セリーナ・ウィリアムスやアザレンカのように、出産後に復帰し、それなりの結果をだしている選手がいるから、大坂にも頑張ってもらいたい。アザレンカは赤子を連れてツアーを転戦していたから、大坂がやれないことはない。体がなまらぬように、出産前からコーチ陣を整え、出産後は体を絞ってツアーに参加してもらいたい。精神的に落ち着けば、グランドスラム制覇を狙うレベルまで戻すことは可能である。それには厳しいトレーニングが不可欠だ。最高のスタッフを揃えて参戦してもらいたい。出産後に早くトーナメントに戻って来られれば、大坂なおみが若い女子テニス選手のロールモデルになるかもしれない。



スポーツのジャンルを問わず、1シーズンだけ好成績を残した選手多いが、それを複数シーズン達成できる選手は少ない。ア・リーグのホームラン記録を塗り替えたジャッジが、今シーズンも同じような突出した成績を残すのは難しい。テニスでも一度だけグランドスラム大会を制覇した選手は多いが、複数回達成した選手は少ない。一度だけなら「まぐれ」で終わってしまう。二度目や三度目の結果を見せてから、ようやくその実力が認められる。だから、グランドスラム大会を4度制覇した大坂選手は歴史に残る女子テニス選手になった。二刀流で2年続けて好成績を達成した大谷選手は大リーグの歴史を塗り替え続けている。2度のW杯総合優勝、2度のジャンプ週間優勝の小林陵侑も、スキージャンプ界のレジェンドになりつつある。

この3人のなかで、大谷選手のストイックさは別格である。シーズンオフのマスコミからの誘いを一切受け付けず、トレーニングに勤しむ姿は求道者そのものである。すでに二刀流で大リーグ史上初を記録し続ける大谷だが、いまだ最高の高みには立っていない。それを目指すから精進を怠らない。もしサイヤング賞とホームラン王の二冠に輝けば、少なくとも今後100年は大谷の記録を破る選手は出てこないだろう。そうなれば、ベーブ・ルースに代わる21世紀の「野球の神様」になるはずである。その目標がある限り、大谷は進化し続けるだろう。怖いのは怪我だけである。

小林陵侑選手が今シーズンのように中堅選手として低迷することはないだろう。スキージャンパーとしてこれから円熟期を迎える歳だから、W杯優勝記録を塗り替えていくことができる。世界選手権の金メダルはまだ残された課題である。スキージャンピング世界記録への挑戦も残っている。今期は五輪翌年の休養年と割り切って、次期シーズンに向けてオフのトレーニングに精を出して、もう一度、世界の頂点に立って欲しい。

### 森保監督に望むこと

Wカップカタール大会の日本チームの戦いは見事だった。ベテランに頼って選手を固定してきたアジア予選の戦い方を改め、調子の良い若い選手を積極的に起用し、絶対的ストライカーがない中で、試合前半は前線の守備を徹底して守り抜き、後半にカウンター攻撃を狙うという戦術が成功した。しかし、次回大会ではカウンター中心の戦い方を変えないと、柳の下に2匹目のドジョウはいない。

苦戦したアジア予選の森保監督への批判は、選手起用の固定化、ベテラン中心の起用、欧州で活躍する若い選手を起用しない消極的な戦い方にたいするものだった。欧州で活躍している日本選手の多くは、欧州の地で才能を見出され、日本で任されていたポジションとは違うポジションで評価されている。そういう事例が続くと、欧州の監督に比べて、日本人監督には選手の才能を見る目がないのではないかと考えてしまう。

富安はアーセナルに行ってから右サイドバックを任されるようになったし、久保はビジャレアルで左ウイング、レアルソシエダでトゥートップの一角を任されるなど、複数のポジションを試されている。ソシエダに移籍してからの久保を見ていると、ペアになる選手がいないと、久保の才能が発揮できないことがはっきりしている。少なくともアジア予選の森保監督の構想には柔軟なポジション変更や選手の組み合わせによる戦術の多様化という試みはなかった。ここが次回大会までに克服すべき課題である。

カタール大会の選手選考でも、スコットランドリーグで活躍する古橋享悟選手と旗手怜央選手は最初から選考外だった。古橋選手を起用する場合には彼に決定的なボールを供給できるパッサーが必要だし、旗手選手はいまだ起用したことがないというリスクがあったからだろう。単調な攻撃戦術が古橋選手を不要にしたが、イニエスタがもっともパスを出しやすかった選手の一人として古橋をあげている。コンビネーションで相手を崩していくという戦術は森保ジャパンにはなかった。ワントップの前田や浅野が前線で相手 DF をかき回し、あわよくばカウンターの速攻で得点を狙うという攻撃戦術では、古橋を使えない。

今大会は見事に嵌った戦術だが、これからもカウンターの速攻を中心に据えるという戦術は通用しないだろう。対ドイツ戦の浅野のゴールは見事だったが、あのゴールは20回やって1回成功するかどうかのシュートである。今大会は見事に嵌ったが、またあれが再現できる保証はまったくない。攻撃の戦術を多様化しないと、日本の攻撃は見透かされてしまう。

また、世界を見ると、若い選手が次から次へと活躍し始めている。欧州で活躍する日本の若い選手をしっかりと追跡し、世代交代を図っていかなければならない。アジア予選のように、スタメンを固定するのではなく、若い才能を臨機応変に起用していくことが不可欠だ。だからこそ、森保監督が欧州に拠点を移し、欧州の日本人選手の動向を追跡し、かつ強豪チームの戦術から学ぶとすることが必要だ。サッカーのメッカから選手を見

なければ、世界標準のチームを編成し指揮することはできない。そうやって初めて、ベストエイトという新しい世界が開けるはずである。

最後に一つ。対ドイツ戦でドイツ陣営に転がったボールをめぐる、浅野選手とリュディガー選手が競った場面があった。この場面、日本チーム随一と言われる浅野選手の快足をみたいと思ったが、リュディガー選手のスプリントが勝った。リュディガー選手が異様に脚を上げて走ったことにたいして、本田圭佑は「挑発」とか、「馬鹿にした」と評して話題になったが、100米走のような競争で、単純に浅野が負けただけだ。まさにボルトン選手の走りのように、太ももを高く上げて、浅野の追隨を許さなかった。足が極端に遅かった本田には、スプリントの走り方が理解できなかったのだろう。浅野の俊足に勝つためには、リュディガー選手は最大限のスプリント力を発揮することが必要だっただけのことだ。